

洗礼者ヨハネの宣教

——ルカ3:7-18の釈義的考察——

嶺 重 淑

序

イエスの宣教活動を主題とする新約聖書の福音書の記述において、洗礼者ヨハネが不可欠な存在であることは言うまでもない。事実、いずれの福音書においてもヨハネはイエスの道を備える先駆者として描かれており（マタ3:1以下、マコ1:2以下、ルカ1:5以下、ヨハ1:6以下）、彼の存在を抜きにしてイエスの宣教活動を理解することはできない。とはいえ、各福音書の記述内容は必ずしも一様ではなく、そこから統一的なヨハネ像を導き出すことは困難であり、むしろそこには各福音書記者のヨハネ像が反映されていると考えるべきであろう¹。

以上の点を踏まえて本稿では、ヨハネの説教について記すルカ3:7-18に注目し、テキストの釈義的検討を通してルカにおけるヨハネの宣教内容の特質を見極めると共に、そこに示されているヨハネの人間像とルカ福音書におけるその意味づけについて考察していきたい。

1. テキストの分析

3:7 そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子

¹ 洗礼者ヨハネについてはヨセフスの『ユダヤ古代誌』にも言及されているが（注26参照）、ヨセフスの描写も福音書記者のそれとは異なっており、その意味でもヨハネの歴史的実像を再構成するのは至難の業である。

らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰がお前たちに教えたのか。8 悔い改めにふさわしい実を結べ。そして『自分たちの父はアブラハムだ』などと心の中で考え始めるな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出される。9 斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木は皆、切り倒されて火に投げ込まれる。」

10 そこで群衆は、「では、私たちは何をすればよいのですか」と彼に尋ねた。11 ヨハネは、「下着を二枚持っている者は一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と彼らに答えた。12 徴税人たちも洗礼を受けるために来て、「先生、私たちは何をすればよいのですか」と彼に言った。13 ヨハネは「規定以上のものは取り立てるな」と彼らに言った。14 兵士も「この私たちは何をすればよいのですか」と彼に尋ねた。ヨハネは、「誰からも金をゆすり取ったり、騙し取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と彼らに言った。

15 民はメシアを待ち望んでおり、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。16a そこでヨハネは皆に向かって言った。b「私はあなたたちに水で洗礼を授けるが、c 私よりも優れた方が来られる。私はその方の履物のひもを解く値打ちもない。d その方は聖霊と火であなただちに洗礼を授けられる。17 そして、手に箕を持って脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」18 ヨハネはほかにも多くのことを勧告し、民に福音を告げ知らせた。

1.1. 文脈と構成

今回扱うルカ3:7-18は、洗礼者ヨハネの宣教活動について記す段落（ルカ3:1-20）に含まれているが、この段落はヨハネとイエスの誕生について叙述する一連の誕生物語（ルカ1:5-2:52）の直後に続いている。もっともこの段落は、先行する誕生物語とは明らかに区別されており、その意味でも、まさにこの段落からイエスの宣教活動を主題とする福音書本来の記述が始められることになる。

このルカ3:1-20は、ヨハネの召命（1-6節）、ヨハネの説教（7-18節）及びヨハネの投獄（19-20節）の3つの部分から構成されているが、今回扱うヨハネの説

教の箇所には異なる主題の3つの説教が含まれており、それぞれ終末の説教（7-9節）、倫理の説教（10-14節）、メシアの説教（15-17節）と特徴づけられる。この段落全体は以下のような構成になっている。

1. ヨハネの召命（1-6節）
 - 1.1. 序：世界史的枠（1-2節）
 - 1.2. ヨハネの登場と旧約預言の引用（3-6節）
2. ヨハネの説教（7-18節）
 - 2.1. 悔い改めの呼びかけ：終末的（黙示的）説教（7-9節）
 - 2.2. 具体的な倫理的勧告（身分説教）：倫理の説教（10-14節）
 - 2.3. 来たるべきメシアの告知：メシア的（キリスト論的）説教（15-17節）
 - 2.4. ヨハネの宣教の要約的報告（18節）
3. ヨハネの投獄（19-20節）

1.2. 資料と編集

ルカ3:1-20はマコ1:2-8、マタ3:1-12及びヨハ1:19-28に並行しているが、この箇所は複数の資料からの記述が複雑に絡み合う形で構成されている²。

7-9節はかなり厳密にマタ3:7-10に並行しており、Q資料に由来すると考えられる³。10-14節についてはマルコにもマタイにも並行記事が見られず、また前後の

2 ルカ1:80と内容的に密接に関わる1-2節はルカの編集句であり、イザヤ書からの引用句を含む3-6節は全体としてマコ1:2-4に依拠しつつもQ資料の影響もを受けていると考えられる（マタ3:2-3参照）。また19-20節はマコ6:17-18に由来する。

3 説教の対象に言及した冒頭の部分のみ異なっているが（ルカ3:7a=群衆／マタ3:7a=ファリサイ派やサドカイ派）、いずれが原初的かは明らかではない。J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-IX* (AB 28), New York ²1983, p. 464は、後続の説教への移行句であるルカ3:7aをルカの編集句と見なしているが、その一方でU. ルツ『マタイによる福音書（1-7章）』（EKK新約聖書註解I/1）小河陽訳、教文館、1990年、204頁は、マタ3:7aをマタイの編集句と見なしている。なお、R. プルトマン『共観福音書伝承史I』（プルトマン著作集1）加山宏路訳、新教出版社、1983年、200頁は、この箇所（ルカ3:7-9//マタ3:7-10）はキリスト教の伝承において流布していたもので後にヨハネの口に置かれたと主張している。

文脈を乱していることから、二次的に付加された可能性が高い⁴。多くの研究者はこの箇所をルカ特殊資料に帰しているが⁵、6-9節の内容を前提とし、8節の悔い改めの要求を展開させているこの箇所が文脈とは全く無関係に独立して伝承されたとは考えにくい⁶。そこで、この箇所はルカ版Q資料に由来するのか⁷、あるいはルカの編集によるのか⁸、二つの可能性が考えられるが、この箇所には多くのルカ的表現が含まれることから⁹、全体としてはルカによって編集的に構

4 一部の研究者 (H. Schürmann, *Das Lukasevangelium*, I (HThK III/1), Freiburg/ Basel/ Wien 1990, p. 169; H. Sahlin, *Studien zum dritten Kapitel des Lukasevangeliums*, Uppsala 1949, p. 37; I. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978, p. 142; A. Plummer, *Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Luke* (ICC), Edinburgh 1989, p. 90; H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 162他) はこの箇所をQ資料に帰し、マタイがこれを採用しなかったと見なしているが、マタイがこの箇所を省略しなければならない明確な根拠は見出せない。

5 例えば、W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 103; T. W. Manson, *The Sayings of Jesus*, London 1949, pp. 253-254; G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas*, I (ÖTK 3/1), Würzburg 1984, p. 82; O. Böcher, *Lukas und Johannes der Täufer*, SNTU. A 4, 1978, p. 31。

6 F. W. Horn, *Glaube und Handeln in der Theologie des Lukas* (GTA26), Göttingen 1983, pp. 92-93。

7 M. Sato, *Q und Prophetie. Studien zur Gattungs- und Traditionsgeschichte der Quelle Q* (WUNT II/29), Tübingen 1988, pp. 54-55, 61。

8 Horn, op. cit., pp. 92-93; P. Hoffmann, *Studien zur Theologie der Logienquelle* (NTA NF 8), Münster 1972, p. 16 n. 5; C. F. Evans, *Saint Luke* (TPI New Testament Commentaries), London/ Philadelphia 1990, p. 240; W. Schmithals, *Das Evangelium nach Lukas* (ZBK 3.1), Zürich 1980, p. 52; A. Loisy, *L'Evangile selon Luc*, Paris 1924, p. 136。

9 ἐπρωτων ... λέγοντες (10, 14節) はルカ好みの表現であり (J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, p. 106)、τί ποιήσωμεν (10, 12, 14節) は使2:37 にも出てくる (ルカ10:25; 18:18; 使16:30; 22:10も参照)。ὁμοίως ποιέω (11節) は新約ではヨハ5:19を除くとルカ6:31; 10:37にのみ見られ、分詞を結合する δὲ καὶ (12節) は共観福音書の用例31回中26回がルカ福音書に含まれており、εἶπαν πρὸς αὐτόν (12節) や εἶπεν πρὸς αὐτούς (13節) もルカ好みの表現である (Jeremias, op. cit., p. 33)。τὸ διατεταγμένον (V. 13) という表現は使23:31にも用いられており、また動詞 διατάσσω はマルコには見られずマタイに1回のみ用いられているのに対してルカ文書には9回 (ルカ4/使5) 用いられ、動詞 πράσσω (13節) もマルコやマタイには全く見られないのに対してルカ文書には18回 (ルカ5回/使13回) 用いられている。この箇所のルカ的表現についてはさらに、Horn, op. cit., pp. 92-93やJeremias, op. cit., pp. 67-70, 106-109を参照。

成されたのであろう¹⁰。もっとも、パレスチナの貧しい人々の社会的状況を前提とする10-11節に関しては伝承（ルカ版Q？）に遡る可能性も十分に考えられ¹¹、これらの節はルカ以前に、同様に群衆を対象とする先行する7-9節と結合しており、ルカはその直後に自らが構成した12-14節を付加したのかもしれない。15-16節a及び18節はおそらくルカの編集句であろう¹²。16節bcdはマコ1:7-8とQ資料（マタ3:11参照）が結合される形で構成されており（さらにヨハ1:26-27, 33参照）¹³、17節はQ資料（マタ3:12参照）に由来する。

以上のことから明らかなように、ルカは複数の資料（マルコとQ）を用いつつ、この箇所を編集的に構成している¹⁴。

2. テキストの内容

2.1. 悔い改めの呼びかけ（7-9節）

ルカ3:1-6のヨハネの召命の記述に続いて7節より一連のヨハネの説教の記述が始まる。ここでヨハネは彼のもとにやって来た人々に対して語り始める。マ

10 この箇所はさらに、三重の問いと答え（ルカ9:57-62; ルカ14:18-20; 14:26-27, 33参照）、徴税人の洗礼、社会的援助の勧告等のルカの要素を含んでいる。

11 L. ショットロフ/W. シュテーゲマン『ナザレのイエス—貧しい者の希望』大貫隆訳、日本基督教団出版局、1989年、225頁。さらに *δύο χιτῶνες* という表現（11節）も非ルカ的である（Jeremias, op. cit., pp. 107-108参照）。ブルトマン、前掲書、250頁によると、ルカ3:10-14は11節の伝承句から「（ルカ自身によって？）紡ぎ出された、比較的遅いヘレニズムの形成句である」。

12 これらの節のルカの表現については、Jeremias, op. cit., pp. 109-111を参照。一方でSchürmann, op. cit., p. 171は、16-17節には当初より導入部があったはずであり、また15節には非ルカの用語が含まれているという理由から15節をQ資料に帰している。

13 特に16節cの「履物のひもを解く」という表現はマコ1:7やヨハ1:27と一致している。一方でマタ3:11の「履物を脱がせる」という表現は使13:25のパウロの言葉にも見られる。またマコ1:8の「聖霊による洗礼」（使1:5参照）は、マタイと同様ルカでは「火と聖霊による洗礼」となっている（16節d）。

14 Schürmann, op. cit., p. 148以下やF. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III /1), Zürich/ Neukirchen-Vluyn 1989, p. 166は、この箇所におけるQ資料の要素を重要視し、大半の節をQ資料に帰している。この箇所全体の伝承についてはさらに、Hoffmann, op. cit., pp. 15-33やS. Schulz, *Q. Spruchquelle der Evangelisten*, Zürich 1972, pp. 366-369を参照。

タイにおいてはユダヤの宗教指導者であるファリサイ派やサドカイ派の人々がヨハネの説教の対象になっているのに対し（マタ3:7）、ルカにおいては「群衆」（ὄχλοι）¹⁵が対象になっており、さらにマルコやマタイにおいては彼らがユダやエルサレム地域からやって来たとされているのに対し（マコ1:4／マタ3:5）、ルカにおいては地域は特定されていない。

彼ら群衆はヨハネから洗礼を受けるためにやって来たが、マルコやマタイが、ヨハネが人々に洗礼を授けたことについて早々と報告しているのに対し（マコ1:5; マタ3:6参照）、ルカにおいては暗示されるにとどまっている¹⁶。事実、ルカはヨハネを洗礼者としてよりも説教者として描いている。ここで人々はヨハネから「蝮の子ら」（マタ23:33参照）と厳しく呼びかけられ、警告を受ける¹⁷。「誰が教えたのか」という修辭的疑問文による問いかけは、後続の裁きのテーマを導入すると共に裁きから逃れるために急いで洗礼を受けようとする群衆の姿を暗示している。ここでは、審判の威嚇によって洗礼が勧められているのではなく、来たるべき審判からの救いを安易に確信しようとする洗礼志願者に対して警告が発せられており、洗礼そのものの意義は相対化されている¹⁸。

ここでヨハネは単に悔い改めることだけではなく、それにふさわしい実を結ぶように要求している（8節／マタ3:5; さらに使26:2も参照）。ルカはマタイとは

15 ルカは伝承部分ではὄχλοι（群衆）（7, 10節）、編集部分ではλαός（民）（15, 18節）を用いているが、ルカにおいて「民」は、神の言葉を受け入れ、救いを待ち望む存在として総じて肯定的に捉えられている（ルカ1:10, 17, 68, 77; 2:10, 31-32）。なお、多くの研究者（Marshall, op. cit., p. 143; Schneider, op. cit., p. 87他）は、この「群衆」の中に徴税人や兵士（12-14節）も含まれているとするが、12節の接続詞καίと3度にわたる同一の問いかけは、むしろ両者が区別されていることを示している。

16 ルカは次の段落において初めて、ヨハネが人々に洗礼を授けていた事実を報告している（ルカ3:21）。

17 「蝮」は端的に邪悪さの形容として用いられる。

18 マタイにおいては、ヨハネの洗礼が悔い改めに導くためのものであると明言されているが（マタ3:11）、ルカにおいては洗礼と悔い改めの関係は必ずしも明らかでなく、焦点はむしろ洗礼から悔い改めへと移っている。さらに、ヨハネの将来の働きについて述べられた誕生物語の記述（ルカ1:15-17; 76-77）においても洗礼については全く触れられていない。

異なり「実」を複数形で表現しているが¹⁹、それによって様々な倫理的な「良い業」(10-14節参照)が意図されているのであろう²⁰。この要求に、審判からの救いの保証をアブラハムの子孫(ヨハ8:33, 37, 39参照)であることに求めようとする態度に対する警告が続く²¹。石ころからでもアブラハムの子を造り出せる神はイスラエルの民を必ずしも必要としていないということがその根拠として述べられるが²²、ここには普遍的救済の視点が認められる。

すでに木の根元に置かれている斧の像は、明らかに間近な審判を示している(9節; さらに17節も参照)。この斧は実を結ぶ木とそうでない木とを区別し(ルカ13:6-9; マタ7:15-20参照)、実を結ばなかった者は火の中へと、すなわち破滅の審判の中へと投げ込まれる(ホセ10:1; エレ2:20; イザ10:33-34)²³。

2.2. 身分説教(10-14節)

この箇所は直前の悔い改めの説教(7-9節)を受け、悔い改めにふさわしい実(8節)の具体的内容を示している²⁴。この身分説教は、ヨハネと三種の人間集団(群衆、徴税人、兵士)との三重の対話から成り、それぞれの対話が、「私たちは何をすればよいのですか」という問いかけと、それに対する答えから構成されている。ここで求められているのは、犠牲奉献や祈りや断食等のユダヤ教における伝統的な悔い改めのわざではなく(マタ6:1以下; ルカ18:9-14参照)、いずれも

19 一部の写本(D, W他)では単数形で記されているが、おそらくそれは、並行するマタイ3:9の単数形、もしくは次節9節の「実」の単数形に影響されたためであろう(蛭沼寿雄『新約本文学演習—ルカ福音書I』、新約研究社、1989年、99頁)。

20 Hoffmann, op. cit., pp. 17-18; Fitzmyer, op. cit., p. 468; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 159.

21 H. Strack/ P. Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, I, München 1922, pp. 116-121参照。

22 この箇所については、アブラハムを岩になぞらえるイザ51:1-2への暗示やアラム語の言葉遊び(岩[複数] = אבנים, 息子たち = בנים)がしばしば指摘される。

23 Bovon, op. cit., p. 171は、ルカがこの警告を直接彼の時代の読者に向けていた可能性を指摘している。

24 10-14節と直前の7-9節は、対象としてのοἱ ὄχλοι(群衆: 7節/10, 12節)、βαπτισθῆναι(授洗する: 7節/12節)、ποιεῖν(行う: 8, 9節/10, 12, 14節)を共有している。

財産に関わる倫理的行為である²⁵。その意味でもルカはここで、伝承における悔い改めの終末論的意味及びその洗礼との関係性を保持しながらも、悔い改めを倫理的行為の視点から捉え直しているのである²⁶。

最初の要求は群衆に向けられている（10-11節）。非常に厳しい悔い改めの説教を聴いた彼らは、裁きを免れるために何を為すべきかとヨハネに尋ねる。この「私たちは何をすればよいのですか」（τί ποιήσωμεν）という群衆の問いに対してヨハネは、下着を二枚持っている者は一枚も持たない者に分け与え（ルカ6:29及びヤコ2:15-17参照）、食べ物についても同様にするように要求する²⁷。二枚目の下着は夜の寒さをしのぐためのものか、もしくは着替え用のものと考えられるが（ルカ9:3; マコ6:9参照）、それを一枚も持たない者に差し出すことが要求され、また食物に関しても同様にすることが要求されている。注目すべきことに、これらの要求は富裕者に対してではなく、一般の群衆、当時の貧しい庶民に対して向けられており、その意味では「極貧の者たち相互の間での連帯」²⁸がここでは問題になっている。この「分ける」というモチーフは、原始キリスト教団の財産共有の記述（使2:44-45; 4:32-37; 5:1-10）によってさらに展開されることになる。

第二、第三の要求はそれぞれ徴税人及び兵士に対して向けられる。徴税人もまた洗礼を受けるためにヨハネのもとにやって来ていたが、彼らはヨハネに「先生」（διδάσκαλε）と呼びかけ、群衆と同様、自分たちは何を為すべきかと尋ねている。それに対してヨハネは、規定以上の税金を取り立てないように要求するが、このことは、彼らがしばしば職権を濫用して、ユダヤ人民衆から余分に税を徴

25 Fitzmyer, op. cit., p. 469によると、ルカにおいてヨハネの禁欲的な生活様式が省かれているのはこの点との関連のためである。

26 H. Sahlin, Die Früchte der Umkehr. Die ethische Verkündigung Johannes des Täuflers nach Lk 3,10-14, *StTh I*, 1948, p. 57も同意見。H. コンツェルマン『時の中心—ルカ神学の研究』田川建三訳、新教出版社、1965年、173頁によると、「身分説教は、終末論的悔い改めの呼びかけを無時間的な倫理訓告に変えている」。因みに、ヨセフス『ユダヤ古代誌』18.116-119も、洗礼者ヨハネを倫理的行為を要求する存在として描いている。

27 衣服や食事を分け与えるようにとの要求は旧約及びユダヤ教文書に頻出する（ヨブ31:16-20; イザ58:7; エゼ18:7; トビ1:17; 4:16他）。

28 ショットロフ/シュテゲマン、前掲書、225頁。

収していたことを裏づけている²⁹。兵士³⁰もまた同様の問いをヨハネに発するが、それに対してヨハネは、人から金をゆすり取ったり、騙し取ったりせずに、自分の給料で満足するように要求している³¹。いずれの場合も彼らに対して職業の放棄ではなく財産の正当な獲得が求められており、その意味でもここでは貪欲に対立する節度（節制）が主題になっている。ここでは第一の要求のように財産分与は要求されていないが、やはり財産に関する要求がなされているという意味で三者に対する要求は共通している³²。

興味深いのは、なぜここでは特に徴税人と兵士について触れられているのかという点である。徴税人はルカにおいても、特にファリサイ派や律法学者によって罪人と見なされているが（ルカ5:30; 7:34; 18:12-13; 19:4）、ルカ自身は彼らをむしろ肯定的に描いており（ルカ5:27-29; 7:29; 15:1; 18:9-14; 19:1-10）、兵士もまたしばしば好意的に描かれている（ルカ7:1-10; 24:47; 使10:1以下; 16:25以下）。両者に対する要求内容からも明らかなように、双方共にユダヤ人民衆からはその貪欲

29 この要求は、イエスとの出会いを通して、財産の半分を貧者に施すだけでなく、騙し取っていた人に対しては十分に補償をすると宣言した徴税人の頭ザアカイの物語（ルカ19:1-10）を思い起こさせる。

30 比較的多数の研究者（Plummer, op. cit., p. 92; Marshall, op. cit., p.143; J. Nolland, *Luke 1-9:20* (WBC 35A), Dallas 1989, p. 150; R. A. カルペナー『ルカによる福音書』（NIB 新約聖書註解4）太田修司訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会、2002年、98頁他）は、ここに出てくる兵士を徴税人の従者と見なしているが、必ずしもそのように断定する必要はないであろう（F. Herrenbrück, *Jesus und die Zöllner. Historische und neutestamentlich-exegetische Untersuchungen* (WUNT II/42), Tübingen, p. 252）。おそらく彼らはローマの軍隊ではなく、ガリラヤのみならずベレアを統括していたヘロデ・アンティパスの軍隊であったと考えられる（T. Zahn, *Das Evangelium des Lucas* (KNT 3), Leipzig/ Erlangen 1920, p. 194に反対）。ここでの兵士を徴税人に同行していた警吏と見なすエレミアス『イエスの宣教—新約聖書神学I』角田信三郎訳、新教出版社、1978年、96-97頁、注19は、彼らはユダヤ人であったと断定しているが（Klein, op. cit., p. 166も同様）、ヘロデ・アンティパスの軍隊には彼の父ヘロデの軍隊と同様（ヨセフス『ユダヤ古代誌』17.198参照）非ユダヤ人も含まれていたと考えられる。一方で Bovon, op. cit., p. 174 n. 39は、ルカは将来の異邦人教会の観点からここではローマ人軍隊のことも想定していた可能性を指摘している。

31 ヨセフスは、ギスカラのヨハネが、盗みとゆすりと強姦をつつしみ、自分たちの糧食に満足するように配下の兵士に警告したと記している（『ユダヤ戦記』2.581）。

32 使2:37では、ペトロの説教を聴いた群衆が同様の問いを発しており、それに対してペトロは、悔い改めて、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるように勧告している。

からの不正行為のために忌み嫌われていたが、ルカにおいてはむしろ好意的に捉えられている点で両者は一致している。おそらくルカは、彼らのような嫌われ者でさえも（すなわち、異邦人も含めたありとあらゆる者が）ヨハネのもとを訪れたことを強調し³³、また悔い改めと貪欲の放棄との関係を明らかにするために、意識的に両者を選んだのであろう³⁴。

2.3. 来たるべきメシアの告知（15-17節）

ここではヨハネのキリスト論的な宣教内容に言及されているが、ルカは主に語録資料から採られた説教部分（16-17節）を自らの編集句（15, 18節）で枠付けている。人々のメシア待望に関する15節の記述（ルカ7:19; 使3:25; ヨハ1:19以下; 創49:10; ゼカ9:9参照）は直前の10-14節の内容には直接つながらず、聴衆の目を再び将来の事柄に向けさせるが、ここでは神の裁きではなくメシアの到来について語られている。民は皆ヨハネが待ち望んでいたメシアではないかと考えていたというルカに特有の記述³⁵は、先行するヨハネの説教の内容にそぐわないが、これにより来たるべきメシアであるイエスの到来がより効果的に描き出される。

事実ヨハネは、民のこのような疑念に対して16～17節の部分で、来たるべきメシアとその偉大さについて三重の仕方では指し示している³⁶。第一に、その来た

33 Horn, op. cit., p. 95は、徴税人と兵士の導入は救済史の世界史的次元を示しているとして、この箇所における普遍主義のモチーフを強調しているが、ヨハネの宣教の段落には世界的規模の宣教は示唆されていない。ホルンはまた、ここには徴税人や兵士が属していたルカの時代のキリスト教会の状況が反映されていると主張している。確かに徴税人がルカの教会に属していた可能性は否定できないが、キリスト者の兵士についての典拠は紀元二世紀前半になって初めて確認できることから、兵士がルカの教会に属していたかどうかは明らかではない。

34 ここにはルカの護教的な視点があったとも考えられる。G. Petzke, *Das Sondergut des Evangeliums nach Lukas* (ZKB), Zürich 1990, pp. 70-71は、国家組織に組み入れられていた徴税人や兵士をキリスト教会が批判的でないことを示すことによって、ルカは支配層に対する教会の忠誠を印象づけようとしたと主張している。

35 ヨハネに関する問いはヨハ1:19-23にも言及されている。これらの記述はこの問いをめぐるキリスト教徒とヨハネの弟子たちとの歴史的な論争を反映しているのかもしれない。

36 ルカ福音書のヨハネは後に弟子をイエスのもとに遣わして、彼が「来たるべき方」なのかどうか尋ねさせている（ルカ7:18-20）。

るべき方はヨハネよりも優れており³⁷、ヨハネはその方の履物の紐をほどく値打ちもないと述べられるが（マコ1:7）、「履物の紐をほどく値打ちもない」という表現は、ヨハネのメシアに対する関係が、主人に対する奴隷の立場に過ぎないことを示している。

第二に、ヨハネが水で洗礼を授けるのに対し、その方は聖霊と火で洗礼を授けるといふ点が挙げられている³⁸。「聖霊による洗礼」は聖霊を分かち与える洗礼として理解されるのに対し、「火」は旧約において裁きの象徴であり、おそらく「火による洗礼」は元来、終末の審判を意味していたのであろう。確かに前出の9節でも直後の17節でも「火」が裁きの文脈で用いられており、その意味では、悔い改める者には「聖霊」が与えられ、悔い改めない者に「火」の裁きが下されるという理解も可能である³⁹。しかしながら、ルカにおいてはその観点は特に強調されておらず、むしろここでは聖霊注ぎのイメージで捉えられているのであろう（使2:3以下参照）⁴⁰。

第三に、その来たるべき方は神の判別の裁きを実行する裁判官として表現されるが、それは、箕をもって麦を不必要な殻からより分けることによって集め、殻を火で焼き払う農夫のイメージで描かれている。9節の像とは異なり、ここでは二段階の判別の裁きが描かれており、破滅のみならず収穫物の収集もここでは同時に表現されている。農夫がすでに箕を持っているということは、判別の時期が間近に迫っていることを暗示している。もっともルカはこの言葉を間近な再臨の意味で理解したのではなく、イエスラエルの分裂のことを考えていたのであろう（ルカ2:35参照）。

37 ルカがマコ1:7の ὀπίσω μου (私の後から) を省略したのだとすれば、それはイエスをヨハネの後継者と見なすことへの抵抗からかもしれない（もっとも使13:25を参照）。

38 マコ1:8と同様、使1:5; 11:6では聖霊による洗礼についてのみ記されており、火による洗礼についての記述はない。また使19:1以下には、ヨハネの洗礼は受けたが聖霊は受けていないヨハネの弟子たちのことが言及されている。

39 例えば、Schürmann, op. cit., pp. 174-175やE. Schweizer, *Das Evangelium nach Lukas* (NTD 3), Göttingen 1982 p. 49がそのように解している。

40 これに対してマタイにおいては、「火による洗礼」は最後の審判との関連で捉えられている（ルツ、前掲書、206-207頁）。

2.4. ヨハネの宣教の要約的報告（18節）

この節は7節以降のヨハネの宣教活動に関する記述を締め括る。ここには、ヨハネは他にも様々な勧告をなし、民に福音を告げ知らせた（εὐαγγελίζομαι）とあり、その意味でもルカはヨハネの活動を旧約待望の時代に限定しているわけではなく⁴¹、イエスの宣教との関連においてイエスの先駆者として捉えている。しかしその一方で、神の国の福音は、ヨハネによってはまだ告知されておらず（マタ3:2参照）、それゆえヨハネは新しい時代へと向う流れの途上に位置づけられていると見なすことができる（ルカ16:16参照）。

結び

以上のルカ3:7-18の釈義的検討から、ルカにおける洗礼者ヨハネの宣教内容の特徴とその人物像について以下の点が明らかとなる。

1. 他の福音書記者と同様ルカにおいても、イエスの宣教活動の記述に先立って、悔い改めの洗礼を宣べ伝える洗礼者ヨハネの宣教活動について述べられているが、ルカはヨハネの授洗活動については直接言及せずに暗示するに留まっており（ルカ3:3, 7, 21参照）、洗礼そのものよりも悔い改めの結実に焦点が移っている。この点からも明らかなように、ルカはヨハネを洗礼者というよりも、救いと裁きを告知し、悔い改めを促す宣教者（説教者）として描いている。
2. ルカにおけるヨハネの宣教の本来の目的は、人々に悔い改めの実を結ぶように要求することにある。これは具体的には自分の欲（貪欲）を制して財産を乏しい者に分け与えるという倫理的実践の勧告であるが（ルカ3:10-14）、ルカ福音書におけるイエスも同様の要求を繰り返している（ルカ11:41; 12:33; 18:22他参照）。
3. （マタイと同様ルカにおいても）ヨハネはアブラハムの子であることは救いの保証にならないと断言し、ユダヤ人の特権的立場を否定することによって普

41 コンツェルマン、前掲書、38-40頁に反対。

遍的救済の視点を打ち出している。この傾向はルカ福音書におけるイエスの教えにおいても示されている（ルカ4:25-27; 10:30-37; 28:17他）。

4. ルカはヨハネの活動の要約的報告（ルカ3:18）において、ヨハネが民に福音を告げ知らせた（εὐαγγελίζομαι）と記しているが、εὐαγγελίζομαιという語は明らかにイエスの福音宣教を暗示している（ルカ4:18; 43; 7:22; 8:1; 16:16; 20:1）。

以上の4つの観点はいずれもイエスとヨハネの関係、より具体的にはイエスの先駆者としてのヨハネの存在を強調している。すでに先行する誕生物語（ルカ1:5-2:52）においても、ルカはヨハネとイエスを並列しつつも後者の優位性を強調して前者を後者の先駆者として描いていたが、このヨハネ宣教の記述においてその点は一層明らかとなる（ルカ3:15-18）。またルカにおいては、この段落の末尾でヨハネの投獄が報告されることによりイエスの活動開始前にヨハネの活動が終わったことが示されているが、まさにこの点もイエスの先駆者としてのヨハネの役割を如実に示している。このように、ルカにおいては特にイエスの先駆者としてのヨハネの特質が強調されており、その意味でも、この点を否定し、両者の断絶のみを強調するコンツェルマンの説⁴²は修正を必要とする。

42 コンツェルマン、前掲書、38-47頁参照。